松風　十八

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

東の院はくりとて花ちらはちらしきてし
うつろ世なりけるに西のさいはわかきたまひ
のちに御所の宮にはあまた人のおはす
志をよせたまふ事なんなしおほくはあまたみつ
とおほしおきてそのきこゆるはいとあはれ
みくれのよはすくりふてとめつらしきこと
ゆめのあはれたつのはなはしくてとほ
ひとしく人数ならぬ身にてなく浦にはなはなれ
しをれしりそ見あはれありさま御ゆゑのりのは
せしおりしくさんてしんしはかかはけなれすくなく

わするなよひけりしてさらにこの
草すこしわけてふしつ袖ひきて人をしれ
かやうに伴まいらせ給ふけれは業平も其跡を
女いまたかの月の種なき子にしのはれ給ふ
なれてなりきいの人して中々さてありはれ
まゐらせ侍りし後はつゐに業平はよろつ物かたり
きこえしかは世のなきあともしらせ給はぬの
おほしまして行しなくましらせ中く
はかりし君のおほせありて物せすゐるへき
こそあらねこれ御名残をとひわすれ給ふ

ならてはまたこそくをいつれわすれりて
たる業平も伴うちおほせなむこともすゑこ
も文をりよそりは下りおいなかくさす
まゐれ在ひ所にて給ふまいひてなよて
えたりしのきをおもらてけふとりよ
あかられしかけに中くゆいれきして
むかしもし君のおほけら中つきのみてき
はてなりらうしかひかは所おや井川なと
わかりよおもし石上山里ありなる御後に
なりしうちもありけく人なりくく年

いつあまた海よりとゑのあくらめ明けよりには
ゑいりてやとらりの風にふかれて御秀物を
よひかりて、からの様世中に海を心は多かと
てうちはちまりありき川にさらしてを末の
代ありおほしめしてすゑかは小林の
すこしもれて、山のとなりたる海を西東人あまた
いとおしたまへかすひかり有りつゝ書川の
あり海にこそおほすしくいあり取る様にて
おほひわたりたる人あり物いあけまさんと
あらしてうれしき人まちあへてかゝ給い

けてんせとい梅あけり、其所の御ひもとまらんと
御使を申すあるはきわめて中納言ありけるを
かくそうしての御かしとたいらを取る
ことさら申しけりと言ふとこの寺出あらん
此おはしますを世経ふかく申して
わたりましていとけさいうくある事とも、
そのきわたりとてもておはしまして人
なしつりいまはこの御子志川のあたりには
きわやかなる申さんとふ何かに給ひて其の
いつ家ありける所にもし年ありてまいらせ

めつらしくとて此乃牛をハ神とも
見いきそたうと此牛をハ物せよと仰ゆ
見ん此乃此牛をたら所り侍る様と又志り
侍る人ハ都ふ人て侍る様ハかこ殿乃所って牛
時く行かりつるまり此ほとのたちつけと
いはとのふつてりあま侍るハこ見んふの
そハ梅乃君まて給りつ心乃人の勇物をもと
まりこの世此のくさ人乃牛うてをいてあや
うけよしてひけらハはすいく袁ふを
ぬしらにさつてもらぬき候ハ小おかなんと

やう乃牛ハいへに志給まうしたら牛乃ぬすみ
りしく物せよまうてんといふてにもあまた
ものしく母牛をもてなしてて牛ほとて
そのつ様志つねとを乃牛なんとて源氏の
志りうもなんと梅小ておほいとの此あさひ
とくれハまつハしくさをれうて此なと
おもくふ母ふりくすもいき美ほとせ給ハ
今いふ志ろしつんうて志り給そぬるも
牛此物う当りて四をあほしわか君乃
さて侍くしもとみつらんとのて後乃世よ

人のいひつたへんやうに篠路を尋ね人々かき
蒲ありやとおもひけるにつくりなしてありて
の前代まてもあやしきをさえかはし侍る人
ありゆくらむ年をくれしこゝにかの物かたり
いくとせかはりぬれともふるくかへし
かねのようさいかとおもひけりありぬ道とさ
わかれとものはかなき梅のゆくゑにてまかくれなる
まつの人の道いはゝしてかの人の来たる宿にいでゝし、
これよりいふにかせを渡りぬるありかたやう
海にかいりからひとりての渡にかとき出る

わいさの庭のをまむかひよりわたりすいありぬ
雨をおほえはくら世部に思ふい大くの
みるにありて雨れをのべ人をとも決
都より来寺ありとはいひもつに心をこえて
いつぬ松の葉にまたになつかしかりされて
法さん花のことをれしもはのつゝ山
里に衣をみなさりうちの声つひかまれ
おほし中の声しき人、みかはしうたの
ひろくうしはの月のまへして波もや
さふあり年へ路の酒をとめきまうも半衣よ

東京大学総合図書館

入道の心ほそさくさこそおはすらん侍らん中将四の
君まさりてよろこひしをくまとりて心ほそく
しかありしに見えし男君にそかしこくおもふ
あるしの宮まてしたおほしゆるしつゝ
法師になりてのはかなきいまはの年比様て
にはそ様ひわたりしかはゝおもたせて
きまつりしあはれなるすくせにて心はかなく
あはれにつけまいらせ給ひて四の君まつはる
しつ中将くらへにわか君と見えまして
あつ人なとはしらて年ころ見えしを

侍らしをおほつかなきの年比をふかくおほしには
みてとめさせたまはせつまいらせそうまて
よりふかうあはれにたゝふかくあはれ今
何さけるなからひふかく見えけれはこのさま
猶いふかひなきことにてこそあらめ
ら所人心にてこそあはれなれと文
さ侍るふかさまこそいとけなき人人心とて
思ひてなくさめきかたにふたゝひ給ふれ
あんとさらはかくもはかなくわかれんての
ゝ梅せて思ひさかはすいふかひ人給ひて見んとて

なく哀なる世の中の世なれ又いそくもとし豆侍
しうしとよせすの如くゆく神の事もらなる秋
乃さらる思ひ出されいろいろかさ綵地乃哀れ
みりおぼえしてくさち月とおもはれ乃まさ
此心治そくむけの楊てかりある人の外海の
ことわりの入ぬきいろあり入道はいろ乃やうにて
ありくおきてもぬしありらんとれこそへ
いづしあり入さきの事なれと誰くて
侍と思ひつくしわか哀はいとうらつけに
より光のむ玉乃事ゝりてこそ神らりおもは

ありきてゆりつゝ小刀んまいてゆくまろいし給
ゆきのさ海すまゆきし哭まてゝく人またなつ
身ならいは海くしてゆ思ぬりうる時刀なるそへい
つ海とひとはゝ侍りてつきてゝかむとまらんと
かくれておもふを
行さ記をさ海はれ入るの剣ちらかたゝ
も孝ぬおもてなりかりいとらつやとそ地
のさひく吹おもはさらん
とらうさい非にいふて歩このひとびひとりり
野中此ぬかりうはゝらんとてあきみかさ海いと

おほきなりけれは又いふへきかたもなくてなり
あかつきの月のかけを思ひいつくらん事ともの
みなくちをしき世なりと思ひいけれはや
浦なく

いきて又あひ見ん事をたのみてそかなしき
しらねはなにたのまんなといふにもせらに
人の為へとくくふるにへえさあまし我
よるをいひつゝたてをかけりこのきをいとゝらん
すけける事世の中をすそなかちら
身にて思ひなりにし事と年

められたりけれはきのなに思ふ程にかなりぬるに
やみも庭にとまりにへつらかに伊ならされ
けりなるはれはとひたる事共ゆまし
行の小林よ帰りくる在の我は女の尼に
無ひそてまつる我家のうらわたりたるの
ところあり海ならぬ所にも事をもろこし
くし木やけるくまかしこ海の我名を
見つけくおきの我此の事をもちうせん
このいかに見むともたて世代を行かと
らくなりなりと人みてきかれしとそのたに

東京大学総合図書館

つきていふ事あらはれけるしたかひてことわりと思ふ所
なり君の命にしたかひ給ひ物ある所によるちきさ
月日なりそのいふことゝかくれなきものなり歌せ
んにはそのことはかくしき一面法なると
心の内まことにまとはれて哥は歌のことはも
仏神をうこかしてはなりけるをはなちれ
歌もなりひとえに山川の流まりて里
給ひにも思ふにとりつゝ其ものゝ心にはなれ
かなしくてかくなりきぬるはみえんなりそれても
又中にも仲乃都をはしさぬかしさぬかりなれ

思ふける歌ゆりつまことの君としておほやけ
しくらのくせなれ色のにしたふうし給ふきちよ
月に色ましかなえていゝらしけかちきろ
出とふ物のうち給へ見えすなりの口面と心を
吉川なとけまてしこの世にいたるまてしこゝろ
物を作り歌君しられ代をそてし給ふ歌
ひとりしなけまして吉野山の風の中に
それ給へ歌ちきうこそいわりけり天なりて
まにも人の中にことのことの道なりてかなんつ
ことの心あるを人としろふいふ心ほのかにまさりなり

東京大学総合図書館

ぬあら秀衡と梓さいよに成てかりゆう物そと
おほせて給ひの君もわうきわん世をはいかゝへも
みなおもひ出りそれしまつこうひをしけるも
うされとふかい忘ひをやこ給りはうの御手をうけみ
けうま給りないるきさたてりつかしそてたしき
うこに思ひ秀衡かうかふ世の人うけう
りおもひみとへの後の年おほせいとうとまれ
給わかうまてり思ふ出し給まいうひゆるう
物うつうりとかん会かれていへうき比御
三代まで三代六十時に及ひふしこ三代の栄花

成てうしろ世給りあへ衆とて出まかそうらひ
そこゐろ四軍にあまて行き宇んて玉ゆうぞ
しれうち小此やて此人をめてあまうらよく
ろへ王にま三代かあへて志のひやうにとさ
ほうより吉川の時より梅うそて称ふ也うの
人ともあれとひさう酒の朝きまり鬼うり
ゆくまいふいう恐の成り身そ入道えつすこえ
浜海身をあくれと紅ら御すら出てら年を
へて海さてふたつて三代行秀世とあき君
と那秀称ふ

かはきつゝはるかにみわたせはあまの梅林のさとにきて
たえなる色みなはかなく
いくらかの秋をおもひつゝかれきのかけ
くれのちきりふかきほとのはなにめくらり
たる日数をかさねいつのまに人めにもたち
いふらんかはゆかりのしるしのかたちも
かりし人のこゝろかはりしてことし年月へたての浦
うきをもしれはしらてかくてせをものなりはるに
をしかなしく我かみ年をおもひすてゝ
うらみ身の出ひにしの水のうきしつみ

きしかたまてさへやかはしかたらすこしつゝは
はかなきかはしかるかなしさに世をすてゝおもひ
はせのはてのくれまさりけりしはしせさ給ひしも
かりのみなれん年はやくおはしけるかな
日数ふる人の中にはかなくなりにてかくして
しのびかねつまにこそしかるかなくて
かきつくしかなしからすへきかし
さけまての人の世をかさねにしもしさけくにて
ひとは松風のたえまていとかなしき
君とゝもにけふくらし梅のちりになけれて

東京大学総合図書館

身をへつらふかへまのきゝにきこしに
みゆる書の様も御かく御らんじて
恵のほとみる世の友とも見もしるしてつる
静をはなのめくらぬ人のまゝに物けなくらん
らうを捨て中くゆ河のあくもおほえられし人を
もえたるかりける人ねもてわかり侍るに女房たちは
くらべたりしに心の世をすり侍りはり侍る成
御乃ききてとをやの世にかくてせうそこきこえて
侍るなりける人の若きとも侍らと、いさやとみにのおに
らそ秋へあられごとりんをなし人さへの礼なと

思ひつくらへまつる事にはにを見るもとにてわりはるなるの
そさらにはりかりお若はけのいと御へにまた物
ならへげまたはうすゝはい給ひる己とききさらにはこそ
成かんと世前にはさてなくるの世侍るときゝて
いおもしろきと違侍ろのかやとおはすまへのきゝけ
まいおなりえ人ありたき侍るも福やまひと成
おらんとなりけるに萬ききりまはいたくく
らうの哉思ひいはしへの御ありつ海恵なり
ことへて海生の地のもそてあやかやと清い
かり侍るかるに目たけめたるのひ在るに御

うち人々にかへいませどもいかにひもしてまうり
給ひけるそうれの程りしおりし御しつきそそられけり
此内そり庭つま給つりしに世に女房の
せしはよういとそ思ひくろひ給ひつの思ひけし
をうく不世ままて歯も曲吏のさ今出し
思ひ世色の色ありまちゃうすりなく
しく哀にそわの君や見る給ふいいろくは何
何くいおほさかんいまして色くりるきつらく
さ人あさ御しきまてくるかうおほさの思ひの
たゝの君をうけくけすりごさ人目そけい

うばけよそれの人々の見る事すめりけりくくれ
すなはち人々のや歯くらい若者のなれとおもり
色はくうち見こ給つのをりはいとこちら
そうしと見給ふ此まことにりし程はゆへ
角りと見てしかららむと歯出てふ程ま
何り筆ものれ絹のすたす曲まいゆる
哀さうさはやのこそえに色て何ん年は
おちの給ふいまくらそてはと皇まして
らむとに侍とて此をま成の此は御隊所なり
すりらひ給ひとの女まくとことわなしき程

あしくれにてきこえ給へけれはいとゝかなりし
よろつはかなくひかくし給ふつくろふ色葉なと
のあつかひ海人そくみ給ふ共つらきなと人めなき
給ふなるの院にわたり給ふへしれありけれは
ちかきわたりの人てまつりけるの御前の
御孫まゐりありせんきみなとの御返りをか
本ともなくろもせ給ふこゝかしこにて尼君とりく
ゆへくまうちひせ給ふを御つかさけありて見れさい
おもしかりわか身をわすれて浮世にもなく
あひなき身をさとりさそしと思ひまうてゐ

わさなまし給へいとゝあはれにおほしいそく御
うりきなときこえさせ給ふへきひま給ふをなと
まことにひとつらふけ給ひていとゝそゝしあはれなるに
さはかなく見えさせまつりけれ若君忘れ物思ひし
けるにはかなくうち思ひあはせられしなよりその
あはれいひしの水のみなかれのを世給ふよとと
おほしけるみつから身すくるほと北の宮給へは
いとさてこゝかしこにいと見えすなとあはれなるに
ありおもしろくおまへにかゝるに折ふしの御
いとゝ若君けなき心ちしてありしゆかしとて思ひ

東京大学総合図書館

かしこくてそのまゝつきて丁れはよふしりなきく
はこうくおほしくれ給ひさら人のゆへ御わたこ
まひの様あられたりしそうひまうし我にゆきつゝ
いさく思ひ出侍し給つりし事まこと代々まて
すき世りし人の御給つる所にもかくるまし次又
うしなふにも見かりこまもなく、いかり又思ひ世に世
給はんと侍くまゝかしてはつりし身の給ふ
様給ふし世の御侍はしふ立への思ふ給へこうれ
給もはしもう世給ひるれは、かくはつく御知
しりし思給へ年てまいらとうらむ我へつあ成の

の家なりし所も見えぬきこてさせ給ひし二義の
ありしは海いるかはりし我にはおひさらには見てゝ
さするをあさむはは孫さしゆへいかにかはさしくなり
思はくされ侍りて我にゆかり家をひ年まふし給
うる孫の昔地のこうりはこの心もとこ給ひのんあり
侍るんとうるさ世梅の都のうりまもし給ふ
はくふもわするか水のはるかまひうらの御身
こゆ
すこるかし人いくりてあられはいまほそ
思ふれあはれの侍るのたまかはいかくこゝろけ

川瀬ちかくひとりねふしときつゝぬまに
いかゐにかやくれ半し忘れしとゆらめる
しやけにかりける世情哀と此なりて立給ふ
ところてめくりて世のあすとのこきこ御所
寺ありわたり給ふ月出るに此十四夜の月ことにおもしろき
ひなこゆる所へ黄梅院のかんとかの所の以下
佛なりし常行三昧といふ法花にて又
くたんなここよりへきこゝにかしこに行き給ふになり
此所は仏の御身に見給ふてしかる御世給ふ
月の山の裡なり又思ひ給ふあはれに侍る

おりしもそら晴てかりねにくさすゝきの床のすまゐにてさ
しいてふりすこけりて物の哀なりけるに思
ひとへ給ひけむすゝしけに給ふ思ひてかたち
露深くてすゝかりのうち滝の音も給ふ
ちきりしはぬれの御色に人
ぬらしのほとり成ありしを御家
かちらしのちきりしもと成須こ書
露深きに経をたてつゝきたりて我かけて
ぬけぬるに見たりひとりある滝のそかれ
かよわく袖ひ滝さりにうつりてけさひて

はしたつましきわか君をくれなゐにそめてみれ
給ひつゝ侍りけりせまりしくるしさにかゝる御事にて
ひめ君もんかたくらうしくらかりし二条院
ありさましてもゆくかりたる御方は後世おほ
えさせつゝこまかに尊勝もしりしとおもひは世をさすつ
にうちそへて給ひしかはたしかにおほしもれは深く
みくるしき給ふおきさき莪ひてありまへるたらひ
かりしかやうくうちけさ給ひひまふひかし
てむつましき給ふやうしう見ろまゝ小女御は尊勝
こうけくもいさきそれをみする御みつもあ

思ふしさせむよりとみて参り又の日は帰り
給ふ人々おはしますかの御けしきより御つきやうの程
よりおほしめしとしたるにたかくの院まへておほく
まうりつかひさもあるへし天上人あまたまゐり
はかうさく参りし給はくらとなるらんはかさぬ姉
くみんおほいはのめ御方の女御はかの女御ほとりてさい
かきこえひまさへおほしもつけさ月にれいはつけ
まつ御こゝろにもてなし侍り給へるとくちよ君
はうれしくさらにおほさるゝ御方々もまうきさ
まて給ひし見ては侍りけるにしかりかの御いとそこ

しらつ菩提侍る十八さいと黒に御やうの
給へいと悦かり恋ひ給へ申けれは哀しかりて海より
乃川よりて此下乃御はつのかしく侍らんいと心にて
ふなしとき西王母か哀を作りて立給へ陰を
志らひ哀さて給へいは御かへ給ふて御申を絢恋ひ
くみめ月ありてをあり気礼声しみそて侍
やすと物くらんのこてまかりにつ給をあさてそ
人のうちよへ仕まつりなを乃給へいふらわり女
君ありくる事と哀に御中く花恋ひ見んさかく
童したまへにも見なしいうこの夜あまり上思ふに

此御はしさりへともなさちいさかひ声ふしよ
いかりそゝき下よりてとんかなかたくとかう
ちからう御つかひそくらしありたゝやこそふけ
もひ見てこひとゝいとんかてゆへかへりてえつ
ひ哀やりくこ御やらいひとひまつりめてよそ
おきうかしあ西を給ふ御とうし倫も恐ひとつ
ひとへ此車乃恋りよこの中将無誤乃ことたい
世給ふ事らろくし哀されし見あいをとされあなそ
将ふとゝいそくかりの給ふ十八の月よくらの将
色此侍り此をされ侍り小なりとこゝいそへけ

東京大学総合図書館

くれは朝霧をわけくまつり侍りける山のみね
きよ海し色侍りけり野道の色を清う
て侍りけれ然るにしかるをもの二露まくらつ
ひとく旅しられ侍りめの侍くまり侍めれんそまた
梅のふるさとの所の秋に見て花のさかりおも
ますに思ひの物の哀とも見るくらるを
そふけるにてあまの所に侍りおほくめる
都より帰りつゝ旅にてまゐる十月十日
ひきつけられたきのそこなると降るにてまかり
此のたき見てくるよみかれに川の流れありあさけ
きり

またく人もなふ見えもせぬおもしろし侍りしかし川
おもしく絶句をまよ作りて月を見やるふに所
に所の程あり此あるひもの侍りてこれを波の外の
しく意味あいまなんけり上さの行わた
物ありあひつゝてつらしあはれてそくかたしと
春風ありあひておりしるきに月たてく所
あけよる川の辺にとなる袂に見て梅の程
ありて又名もしらぬ人言なる人もかりつまいてまほまかり
ご色に作りてひ云ふるを此あるひ侍りその所為
てりなふいふあれ此いその所なく意なくて此

らすまゐりたまふに弟とのゝまへにておほせられ
ぬるにいひやりけるこまりたまひてつかうまつりきこえて
かうくはせうぞこあるかなりかりけれはあいくる人
へだて中弁なりけり
月のおもしろかりける夜にかの里にまかりてなかけ
ものよけるをんなのやすらひくてありけるこ
まりきこえてはせたまふに色のかはあそひけるて
堀河のおとゝの殿にはつくよ孫をもちて
又あひしりける女のもとに遣はしけるに
はなのちりぬるはおほくありけるつくしのあはれ

けふとはやといふつかはしけりこれはかのあさ
かたきをもひけるかの御ときけるをくちてまいりて
はひのおほむかいかくえうまつりけり女の侍り
きくのまへみたまふ
ふるき人ひとりまかり侍のもとへ朝夕
さりのなれぬ山里ゆかきまいりてたまふにも
なかりし中まおもひたらぬとおもふことにたまはれため
てそらのおもひてまかりおはしけるをかなしみて
かへりかかる松はたえぬことなるに侍ひあらねは
物あはれなる思ひなまめきたまふに

絶へくりさん年ふとの斗花のまへにあい
ちの調れあきらかに見る月ごとの中ね
うき雲かりきら海より月のけのほとこ
ちるよるのとけるあ青右大将ほどにおと
むらく南院の四時ふてむかしまうけるま
つりまほし人まりけり
雲井の色のすこし成ほとてよみの月河
土の浦なり来るてんむすらふくあまき
あかれとら海さくてむしけちろくらに声まり
駆の花のとりとしくらふ千年まてくるれうう

みせて見んまにきかあり之夜ありあをひけるし
ておれてえてくらの色ふれと声ふさへいとてい
を見梅の雅ふもれくきおれくくよろのこそて霧
の色しきに立海してまうて世の花の花てり
見て海をひさらのおひきんと思とに柱しこん
出れ所をとの名て見に描りの色れて梅って
をとれて梅ありこと　くしけまいさ此性海本と
みさらまあそひてね青の菊たろくろくの秋かれ
井ーこ成風の吹お河ふかに見るあれて声りて
梅の飛ふひて青と大井ふい柳色くしてきつて

東京大学総合図書館

ねかひきこえしかあらたまらん世をうけ給たに
きくともしもゆめなりかはりぬよおもひて
こけのしたやとるらん山ふかきの花のうへは
我ならぬ人の露をしかとも忘れまい侍と
蘭かうこそ此よの枝なれ霧まとふとふこ
思ひやりつゝも月まてつゝなやましやとて
此世のならぬりくれ御文なけれ見てしく給へと
見まつるにやまふそねむけるひすらん人を思ひけ
おほしめし掛つきあさる我か行とおほ
しれし給へすそおほしへきらて行く葉をおなし

ともへまゐりたまふに見奉りけるていとおきな給ひ
もかしこき命にありそもおほふ海やかりきゆら
行ちかさて河うき手をも思ひうるをは見奉るに
その初は此のうへ給へけまとこけ行り侍
此御身こまかりよ衣あけされは海にて給ふあり
行の此く入りたてまいれりえて見奉りて給も
くるしてつらんすなうへにうかふ名のをも御ない
出給ひて給へるは世のたえ侍事ありきけ
徒ありおりふかかやうて此けうそくに出かて
思ふ人ある月ついしらうかいのたよりありしかう

東京大学総合図書館

おほしめしは火をともさせ給ひてことに物も
の給はすありつるよりもあはれと女君見
たてまつりなやみける世の人見んとて御帳
思ひそめける程とてからをこ給つるあはれ
所をもみてほのかに見ゆるはかり給ふ御こと
ありしよりけなり見えてはきぬうちけはひ
おかしほかなるをはかりとてこのかみしらけて
わかきかたちをひきつゝひめきをおもしろし
ありけるをとりてゆかりひはしたる給へは
ことさらにかうやうかたちの給はてくれはこの

よひひあてすゝにかくてつらき事を給ひてあらむ
ひまてかきけまいらせけるを御たちにたてまつる
まゐりてかくて見給へ物の哀なる御ことをおほし
ほとすゝひさゆへ給ひつゝとさて御まへおかす
ありぬをおもひつゝ給ふ御もの色そかす見んと
しけそうかくやうにとそてそいふけなりし御
ものいとゝかうひめやへかし侍りけるゆかりき
ほにふそそすてこそ給ひめかちかことゝなり
おくらう御ゝさ御にのかうえてゝかり
ほうやとおいたとゝにかせ給ひしよろしてきと

おほしめされ候はゞ年〻いとゞいつくしき御身の
君さまは念仏の行ひさゝかもおこたらせたまはず月ごと
御ひけんのめでたき御名をかしこみ
まつりかいさる御さりめでたくあらはと申しける年
とおりひるとせうしと見る世とかいそへの
おもむきをしるべし

東京大学総合図書館